

Title	ドイツ語の絶対比較級
Sub Title	Zum Absoluten Komparativ im Deutschen
Author	中山, 豊(Nakayama, Yutaka)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2006
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.91, No.2 (2006. 12) ,p.298- 315
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	Essays in Honour of Profrssor Takahiro Shibata
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00910002-0298

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ドイツ語の絶対比較級

Zum Absoluten Komparativ im Deutschen

中山豊

Yutaka Nakayama

When the aerials are down,
and your spirit is covered with snows of cynicism
and the ice of pessimism,
then you are grown old, even at twenty,
but as long as your aerials are up,
to catch the waves of optimism,
there is hope you may die young at eighty.

Samuel Ullman

0 序

ドイツ語の形容詞の比較級には、(1a) のように比較対象を導く *als* 句を伴い、「より～だ」の意味をもつ相対比較級と並んで、(2) のように明確な比較対象を伴わずに「かなり」とか「どちらかといえば」の意を示す絶対比較級の用法とがある。相対比較級においては(1b) のように比較対象が明示されてはなくても文脈・状況から（例えばこの場合は *als das Bild* のように）判断できる場合もある。¹

(1) a. Während bei uns Bilder längst *mächtiger* seien als Worte, herrsche in

¹ 例文はいずれも DAAD 発行の *Deutsch-Arabisch/Iranischer Hochschuldialog* 2006, S. 23 による。(1b) では強意の副詞 *viel* の存在も絶対比較級の読みを排除する鍵になっている(1.4 を参照)。

der islamischen Welt ein Bilderverbot.

b. Das Wort habe ein viel *größeres* Gewicht und das Bildverständnis sei ein völlig anderes [...]

- (2) Regelmäßige Reisen der Studierenden, Stipendien für *längere* Projekte und ein methodisch-didaktischer Austausch mit seinen Kollegen sind die Bausteine.

本論では、第1章において絶対比較級のもつ様々な文法的特性を明らかにする。第2章では、絶対比較級に関する主要な説を検討し、最終的には絶対比較級は本質的には相対比較級の変種に過ぎず、両者は統一的に説明することが可能であることを示す。

1. 絶対比較級の諸特徴

絶対比較級は相対比較級とは異なる様々な文法的特性を示す。第1節ではどのような形容詞において絶対比較級の形成が可能なのか、その語彙的制約を、第2節では相対比較級との決定的違いである比較対象の欠如の問題を、第3節では絶対比較級形容詞の統語的機能についての制約について、第4節で残されたその他の特徴を考察する。

1. 1 語彙的制約

形容詞の多くは *alt, gut, jung, schön* などのように比較変化が可能で、また程度を表す副詞の *sehr, besonders, überaus* などでも強調することができる段階的な (*graduierbar*) 形容詞である。これに対して *ledig / verheirat, tot / lebendig* のように二者択一的判断を示す形容詞を始めとして段階付けが文法的に許されない非段階的形容詞も多数存在する。非段階的な形容詞には当然のことではあるが絶対比較の用法もない。

段階的形容詞もそのすべてに絶対比較級が容認されるわけではない。2章で触れる分離説をとる Engel (1988:568) は絶対比較級の用法は *alt, gut,*

jung, schön などのごく少数の形容詞に限られていると述べ、Helbig / Buscha (1988 在間訳 1993:145) は jung, alt, lang, kurz, groß の 5 個を挙げているに過ぎない。

最も多くの例を挙げているのは Thurmair (2001:228) で、Engel (1991)、Duden (1995)、Helbig / Buscha (1991)、Weinrich (1993) などの文法書から、länger, kürzer, größer, kleiner, jünger, älter, häufiger, näher, weiter, neuer, früher, kühler, besser, reicher, ärmer, höher, tiefer, entfernter, ausführlicher, wärmer など 20 個あまりの形容詞を採取している。² さらに実際の資料をあたり、*fleißigere Schüler, wichtigere Persönlichkeit, begabtere / neugierigere Kinder, billigere T-Shirts, teurere Schuhe, in tristeren Momenten, in depressiveren Phasen* など絶対比較は他の形容詞にも見られる現象であることを示唆している。

ある比較級形容詞が絶対的な読みを許すか否かの判断については、ドイツ語話者の間にもゆれがある。älter のように容認度の高い絶対比較級は出現頻度も高いので、辞書では独立した見出し語にしているものもある。例えば CD 版 „Duden - Deutsches Universalwörterbuch 2001“ の検索機能を用いて <absoluter Komparativ> を調べてみると älter, jünger, kürzer, länger, näher の 5 個の形容詞に副詞の öfter をあわせた 6 語が見出し語として立てられ、語義も用例も記載されていることが分かる。(3) の kürzer の項を例として挙げておこう。

- (3) **kürzler** <Adj.>: **1.** <absoluter Komp.> **a)** *von relativ geringer räumlicher Ausdehnung in einer Richtung: bei -en Fahrten das Fahrrad nehmen; b)* *sich über einen relativ kurzen Zeitraum erstreckend: für -e Zeit verreist sein.* **2.** Komp. zu kurz.

² Thurmair は絶対比較級を indifferenten Komparativ と呼んでいる。

完全に語彙の中に取り入れられたと言える上記の形容詞に対して、他の形容詞には絶対比較の読みを認めるか否かに関して判断が分かっているものがある。例えば *fleißig* / *faul* の場合には(4)の Varnhorn(1993:98)と(5)の Thurmair(2001:228f.)では *fleißiger* の評価について意見が分かっている。他方 *fauler* の判断では両者は一致しており、*häßlicher*, *schrecklicher* などと同様に負の極を表す評価の形容詞の比較級の場合には絶対比較としての解釈が難しくなる傾向がある。

- (4) a. ? *ein fleißigerer Herr*
b. ? *einer der fauleren Menschen dieser Welt.*
- (5) a. *Fleißigere Schüler brauchen in Bayern keine Angst zu haben.*
b. ? *Faulere Schüler schaffen in Bayern das Abitur nicht.*

絶対比較級は比較級の特殊な用法で、英語では *a tolerably / fairly / rather long walk* のように原級に副詞を付加して迂言的に表すことが普通である (Curme1931: 508)。ドイツ語では英語よりも屈折比較変化を用いることが多いとはいえ (Friederich1994:162)、(3)で *kürzer* を *relativ kurz* とパラフレーズしているように迂言形との競合があることも確かである。絶対比較級を迂言的に表す機能をもつ副詞には *relativ* の他にも *ziemlich*, *vergleichsweise*, *verhältnismäßig* などがあり、(6)はその実例である。このような競合する形式の存在も、絶対比較級の出現頻度が低い一因であろう。

- (6) In seinen Augen ist die „Generation Praktikum“ durchaus bereit, sich unter *vergleichsweise schlechten* Bedingungen einzubringen. (Die Welt 22.9.2006)

1.2 比較対象の欠如

絶対比較級を絶対比較級たらしめている最も顕著な特徴は比較対象の

欠如である。したがって、前出(1a)のように als 句が比較構文内に共起している場合は絶対比較級の解釈はありえない。

問題は(1b)のように比較対象が同一文中に als 句で明示されていないときの判断である。(1b)は das Wort との意味的対立で比較対象が das Bild であることが判断できる場合であるが、比較対象は(7)のように比較構文の前や(8)のように後に出現することもある。

(7) *Das Auto ist schnell. Aber die U-Bahn ist schneller.*

(8) **Kauder rechnet mit längerem Einsatz der Bundeswehr im Kongo**

Berlin - Der Einsatz der Bundeswehr im Kongo kann nach Einschätzung von Unionsfraktionschef Volker Kauder *länger* dauern *als die veranschlagten vier Monate*. (Die Welt 11.9.2006) [イタリックによる強調は筆者]

(8)の Kauder rechnet mit längerem Einsatz der Bundeswehr im Kongo は新聞記事の見出しで、これを先ず目にする読者は「～よりも長い」という相対比較なのか、「ある程度長い」という絶対比較なのかのが分からないまま、後に続く本文のある種の緊張感をもって読むことになる。この緊張は本文に入って最初の文の中に als 句を見出すことによって解消される。このように比較級の曖昧さは一定の文体的効果を果たすことがある。

(7)、(8)とは異なり(9)のように文脈から切り離された文は、形容詞が絶対比較の語彙的制約に反しないものである限り、(9a)の相対比較と、(9b)の絶対比較の2通りの読みを持つことになる。

(9) Das ist ein *längeres* Brett. (Bierwisch 1987: 179)

→ a. Das ist ein *längeres* Brett [als das dort].

→ b. Das ist ein *mittellanges* Brett.

1. 3 絶対比較級形容詞の統語的機能

絶対比較・相対比較の解釈に関して(9)は両義的であったが、同じ比較級を含む構文でも、以下の(10)は一義的で、相対的比較級の解釈のみを許容する。

(10) Das Brett ist länger.

(9)と(10)との多義性に関する異なるふるまいは相対比較級と絶対比較級との担いうる統語的機能の違いに由来している。ふつう比較級は、付加語、副詞、述語のいずれの用法でも相対比較として解釈できるが、絶対比較級は付加語的用法に見られることが多く、述語的用法では用いにくいのである。したがって、文脈なしで(11)や(12)のような比較表現を用いるとそれぞれ(b)の述語的用法のほうが(a)の付加語的用法よりも受信者に「いったい誰より年寄りなのか」、「何より暖かいのか」という比較対象を求める疑問を引き起こしやすい、すなわち相対比較級として解釈しやすい傾向が認められる。

(11) a. eine ältere Dame

b. die Dame ist älter (Thurmair(2001: 225f))

(12) a. wärmeres Wasser

T

b. das Wasser ist wärmer (Thurmair(2001: 226))

ただし、Thurmair (2001:225, Anm. 68)によると、(11b)のほうは(12b)と比較して、このままで完結しており、絶対比較としての解釈もより容認しやすいようである。この理由をThurmairはälterとDameの連結のほうがwärmerとWasserの結びつきよりも慣習化されているためではないかと考えている。älterの絶対比較級としての述語的用法はEngel(1988: 570)やDuden – Deutsches Universalwörterbuch (2001:120)のälterの項にもdas Auto ist schon ä[lter]という例文が記載されており、確かに認知度が高い。しか

しこの *älter* のように語彙化した特殊な例を除き、形容詞の比較級は一般的には *wärmer* のように述語的用法では絶対比較の解釈を許容しにくい、と言えよう。

1. 4 その他の特徴

以上絶対比較級には、それを形成する形容詞に関して語彙的な制約あり、比較の対象が比較構文内にも文脈上も出現しない、述語的用法は例外的に語彙化が進んだ形容詞を除き認められない、という特徴があることを見てきた。Thurmair (2001:225f.)はさらに以下のような特徴をも挙げているが、ここでは深く立ち入ることはせず、多少の修正を加えて列記しておくにとどめておく。

- 1) 絶対比較級は基本的には不定名詞句に表れる。定名詞句の比較級は比較対象をもつ相対比較級として解釈されることが多い。
- 2) 絶対比較級は原則として(13)が示すように *etwas* や *ein wenig* などの意味上齟齬をきたさないごく少数の語を除いて、程度を表す副詞成分に修飾されることはない。(14)のように程度の差を表す副詞成分による限定を許すのは相対比較級に限られる。

(13) a. *an *ziemlich* kälteren Tagen

b. Frau Maier war eine für die damalige Zeit schon *etwas* / *ein wenig* ältere Dame. (Varnhorn (1993:110))

(14) eine [*um*] 20 Jahre ältere Dame

- 3) 比較級を含む名詞句においては(15a)が示すように絶対比較級の形容詞には強勢は置かれない。³ これに対して、(15b)の相対比較級では形容詞に強勢が置かれている。

³ 大文字で示した音節は文強勢の位置を示す。

(15) a. Er hat eine größere SAche vor.

b. Er hat eine GRÖßere Sache [als diese Sache] vor.

以上見てきた諸特徴の中には瑣末的であったり、単に傾向を表しているのに過ぎないものもあるが、明確な比較対象が比較構文内に表れない、あるいは文脈からも推定することができないということが、絶対比較級にとって不可欠な要件であることは確認しておこう。

2. 絶対比較級をめぐる3つの説

絶対比較級については様々な説明がなされているが、Duden^(s)1995: 295)が折衷的な文法書にふさわしく、代表的な3つの説を以下のようにまとめている：

Die Komparativform wird auch dann gebraucht, wenn sich der Vergleich nicht auf die Grundstufe des betreffenden Adjektivs bezieht, sondern auf eine allgemeine Erwartungshaltung, eine Gewohnheitsnorm, das Normale in einer bestimmten Situation. [比較級一元説：標準値比較対象説]

Dieser Gebrauch nähert sich dem des Elativs [...], so daß man von einem *a b s o l u t e n* Komparativ sprechen kann. Bei diesem Gebrauch hat der Komparativ nicht steigernde, sondern abschwächende, mindernde, einschränkende Bedeutung [...] [比較級二元説A：分離説]

Dieser Gebrauch ist vor allem üblich bei bestimmten Gegensatzpaaren. Der Komparativ *besser* z. B wird in diesem Fall nicht auf *gut*, sondern auf das Gegenwort *schlecht* bezogen: *Dem Kranken geht es heute schon wesentlich besser* (aber immer noch schlechter, als wenn es ihm gutginge). Mit *ein älterer Herr* meint man einen Herrn, der nicht mehr jung, aber auch noch nicht alt ist (in diesem Fall geht die Blickrichtung von *jung* aus: *jung* – *älter*

- *alt*). Entsprechend meint man mit *eine jüngere Dame* eine Dame, die noch nicht alt, aber auch nicht mehr jung ist (in diesem Fall geht die Blickrichtung von *alt* aus: *alt* - *jünger* - *jung*). [比較級二元説B：反意語比較対象説]

比較級一元説が絶対比較級と相対比較級の持つ機能を統一的に説明しようとするのに対して、比較級二元説は両者のもつ機能は異なるものとして説明しようとする。比較級二元説は（A）相対比較級と絶対比較級は全く異なるものとして分離して扱うべきだとする分離説と、（B）相対比較級も絶対比較級もともに形容詞が表す性質の程度を高める機能をもつが、絶対比較級は比較級形容詞の反意語（例えば *älter* ならば *jung*）を比較の対象にしているものとみなす反意語比較対象説とに分けられる。

これらの説がいずれも記述的に妥当であるならば、「オッカムの剃刀」の原則に従って一元説が好ましいことは明らかである。本章ではこれまでの絶対的比較級の研究を整理し、この分野において新しい視野を開いた Becker(2005) に従って、2つの二元説の難点を示し、ドイツ語の比較級を統一的に説明していきたい。

2. 1 分離説

分離説の代表者である Engel (1988: 563)は形容詞の相対的用法と絶対的用法の区別を一般に行われている比較級と最上級のみならず、原級にまで広げて、いずれの級においても両者は異なるものとして分けて扱っている。形容詞は相対的用法ではその計測の尺度の全域を指し示るのに対し、絶対的用法では計測の尺度の特定の範囲のみを示す。以下の各組の例文において(a)は絶対的用法、(b)は相対的用法である：

(16) a. Das Brett ist aber *lang*!

b. Wie *lang* ist das Brett? – Es ist nur 1cm *lang*.

(17) a. die *längsten* Straßen

b. die *längste* Straße in unserer Nachbarschaft

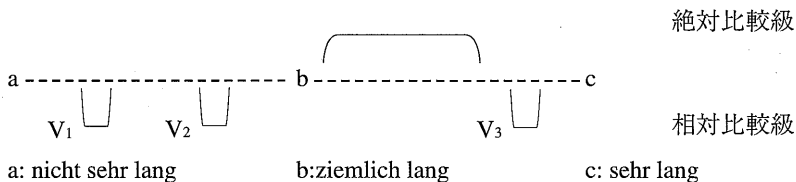
(18) a. eine *längere* Straße

b. die *längere* von zwei Straßen

例文(16a)の絶対原級が反義語の *kurz* と対立して尺度の上位の範囲のみを指しているの対して、(16b)の相対原級の *lang* は長いものから短いものまでどのような長さをも中立的に示す。また(17a)の絶対最上級は通りの長さの尺度の最上位の部分だけを指すが、(17b)の相対最上級はその通りが「このあたりでは一番長い」ことを表すだけで、それが必ずしも一般的な尺度と照らし合わせて最も長いことを示すわけではない。

同様に本稿の主題である(18a)と(18b)の2種類の比較級の違いも Engel(1988:570)に従えば(19)のような図を使って説明可能である。(19)の上部において(18a)の絶対比較級が示すのは道路の長さの尺度においては普通よりもある程度上位に位置する特定の範囲に限られる。他方(18b)の相対比較級は尺度の下部に示されているように、特定の範囲を示すのではなく、さまざまな長さをもつ任意の比較対象 (V_n) よりも右側に位置する、すなわち V_n より長いことを示すだけである。比較対象が V_1 であれば、当該の通りは V_1 よりは長いけれども尺度全体からみれば短く、比較対象が V_3 であれば実際に長い通りを示すことになる。

(19)



Engelの相対比較級と絶対比較級を性質の異なるものとして分けて考え

る分離説は記述的には正しいし、また各級に渡る2つの用法の類似性をも示すことができる。しかしこの説は、Becker (2005:101)が指摘するように、比較級において同一の形式がなぜ異なる機能を示すのか、という説明を放棄してしまうという点で十分に満足できるものとは言えない。

絶対比較級の原理的な説明を断念し、これを「一部の形容詞」に見られる特殊な現象として比較級の考察の対象からはずす、という立場をとっているのが Helbig / Buscha (1988, 在間他訳 1993:145)である。彼らによれば、「比較級は実際的な比較ではなく、一般的基準との相対関係の表示に用い」、ein junger Mann はおよそ15～30歳、ein jüngerer Mann はおよそ30～45歳、ein älterer Mann はおよそ50～65歳、ein alter Mann はおよそ70歳以上の男性をそれぞれ示すイディオムということになる。この分離説の亜種ともいえるイディオム説は、年齢の範囲が現在のドイツ語圏の話者の平均的な言語感覚を表しているかどうかはともかく、各表現の相対的な関係は正しく記述していることは確かである。

分離説には Renicke(1955)や上掲の Duden(1995: 295)にみられるように、絶対比較級の機能は程度を高めることではなく逆に緩和する(Steigerungsinversion 説)という変種もある。しかし、この説には Becker(2005:101)が指摘するように、比較級という同じ形態がなぜあるときには程度を高め、あるときには程度を緩和するという逆の機能をもちうるのか、という疑問が残る。またこの説は次に見る反意語比較説と同様に比較級の比較対象を原級だと考える誤りも犯している点でも支持できない。

2. 2 反意語比較対象説

分離説が相対比較級と絶対比較級の関連の説明を断念しているのに対して、反意語比較対象説はどちらにも程度がより高いことを表す機能を認めることで、少なくとも両者を関連づけしようと試みる。この説は前述の Engel と後述の Weinrich を除く現在の文法書に広く見られる支配的

説とも言えよう。⁴

その一例として以下に Hentschel / Weydt (2003:216f.)を引用する。

Beim Komparativ können Fälle beobachtet werden, in denen sozusagen eine Negativsteigerung, eine Steigerung gegenüber dem jeweiligen Antonym, vorliegt. So geht es einem Kranken, dem es *besser* geht, nicht etwa ‚mehr als gut‘ sondern nur ‚besser als schlecht‘; und eine *jüngere Frau* ist nicht jünger als eine andere, die *jung* ist, sondern ‚weniger alt‘. Ähnlich: *eine längere Strecke* („eine weniger kurze Strecke“); *eine größere Summe* („eine weniger kleine Summe“); *ein kleinerer Umweg* („ein weniger großer Umweg“) u. ä.

ここで Hentschel / Weydt は反意語指示対象説支持者に典型的な 2 つの誤りを犯している。第 1 に「体の具合が悪い病人が良くなった」という場合、比較構文内では指示対象が明示されていないが、この指示対象は文脈上明らかに *besser als vorher* である (Becker(2005: 103))。すなわちこれは絶対比較級ではなく相対比較級なのだ。前節の(19)の図において *lang* に代えて *gut* を入れて相対比較の尺度をみると、この比較級は比較対象が V_i あたりの程度の低い範囲に位置している場合にすぎないことがわかるだろう。

Hentschel / Weydt の第 2 の誤謬は、前述の Recnicke にもあてはまる比較級の機能についての基本的誤解である。すなわちこの説では相対比較級

⁴ Sütterlin(⁴1918: 107)を始めとして、Brinkmann (1971: 106)、Erben (1972: 187)、Schulz/Griesbach (1972:128)、Liebsch/Döring(1976:113)、Jung (1980: 305f.)、Heidolph u. a. (1981,613)、Dückert/Kempcke (1984: 26)、Sommerfeldt/Starke (1988:146)、Flämig(1991:499)などがこの説に基づいて絶対比較級を説明している。Duden (⁷2005:378f.)は Duden(⁶1995)の網羅的な記述を放棄してこの説だけを取り上げている。

はその原級を比較の対象とし(mehr als ,gut')、相対比較級はその反意語を比較対象とする(besser als ,schlecht')と説くが、比較構文の比較対象は gut や schlecht などの形容詞そのものではなく、あくまでも als で導かれる表現が指示する言語外の対象物なのだ。

反意語対象説は記述的にも不備がある。この説では schlecht – besser – gut の順で程度が高まることになるが、これでは schlechter の位置が定まらない。schlechter の比較対象はその反意語である gut になるはずだから、gut – schlechter – schlecht の順に「悪さ」の度合いが増すことになるが、besser と schlechter との関係はこの説では説明不可能である。

2. 3 標準値比較対象説

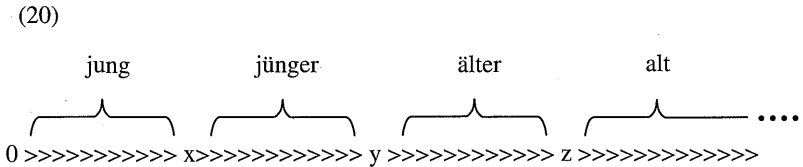
2つの比較級二元説のうち、分離説は記述的に正しくても相対・絶対比較級の統一的な説明ができず、また反意語対象説は両者の程度を高める共通の性質を説明しようとするが、記述的には妥当ではない、ということを見た。両者とも比較対象が欠如するとなぜ相対比較級とは一見全く異なるような絶対比較級の解釈が生じるのかが説明できない。

標準値比較対象説の基本的主張はごく単純で、比較対象が比較構文中にも文脈上も指定されていない場合にはあらかじめ決められた標準値が自動的に比較対象となる、というものである。この標準値は、文法家によって、“normal[er], sonst üblich[er] Grad“ (Blatz (1900: 243))、„Durchschnittsniveau“ (Wilmanns (21899:447))、„Durchschnittsbeschaffenheit“ (Behaghel (1923:244))、„Mitte“ (Fränkel (1974:456))、„Erwartungsnorm[en]“ (Weinrich(1993: 503))、„Indifferenzzone“ (Thurmair(2001: 223)) などと呼ばれてきたものである。

標準値がどのような領域を指すかを示しているのは Wilmanns(1899:447) と Fränkel (1974: 456)で、彼らによれば標準値を超えて尺度の上位の域には達しない程度の範囲を示すことになる。これは分離説の(19) 図が指す絶対比較級の範囲にほぼ相当するものと考えられる。

本節では絶対比較級の示す範囲についての合意を踏まえて、標準値比較対象説をより精緻なものにした Becker(2005) の理論を援用して、比較級の機能を統一的に説明してみたい。例として年齢に関する形容詞の対 alt / jung をとりあげる。

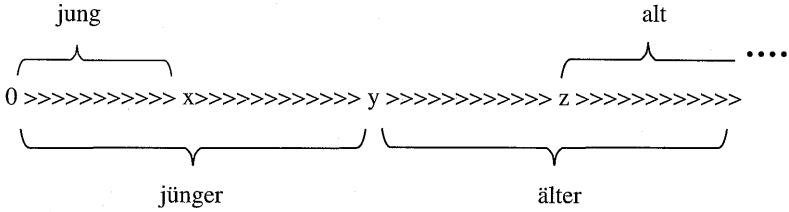
(20)の図はドイツ語の年齢を表す尺度において、絶対比較級が示す領域を現実の使用の実情に合わせて示したものである。y は標準値で Fränkel (1974:456) によれば男性でほぼ 45 歳である。x, z は jung と alt の原級と比較級がそれぞれ指示する領域の境界を表しており、Helbig / Buscha(1988 在間他訳 1993:145) によれば x は 30 歳あたり、z は 65 歳あたりに相当する。



絶対比較級の実際の使用域を示す図(20)は記述的には問題がないけれども、これではなぜ比較級の jünger が原級の jung よりも程度を弱めて年齢が高い領域を（同様になぜ比較級の älter が原級の alt よりも年齢が低い領域を）指し示しているかを説明していない。

Becker(2005: 111)はここで jünger, älter の不可解な性質を語用論的な要因によるものと考え、両者は意味論的には(21)の図3のようなすっきりした範囲を指し示していると説明する。

(21)



(21)の図において、比較対象である標準値 y に対して、絶対比較級の *jünger* は陰極である *jung* に向かっている程度の高まりを示し、絶対比較級の *älter* は陽極である *alt* に向かっている程度の高まりを示す。この説明によれば絶対比較級も相対比較級と同様に比較対象よりも度合いが高いことを示す機能を持つことになり、2つの比較級の統一的説明が可能になるのである。

ただこのままではまだ(20)の実際の運用と(21)の理論的意味との乖離が説明されていない。この説明をおこなうためにわざわざ特別な装置を用意しなければならないのであれば、標準値比較対象説は分離説と比して余り魅力的な説にはならない。しかしこの一元説の利点はまさにそのようなその場限りの装置を用いなくても Grice (1975)の一般的な語用論的な原理によってこの問題を解決するところにある。すなわち話し手が量の格率を守って必要とされるだけの情報を提供し、様態の確率を守って不明瞭な表現を避けるならば、 z の領域を超えた年齢に達した人をはっきりとした表現の *ein alter Herr* と言うはずである。しかし話し手はそう言わないことによって、*Herr* で指示される当該の人が z の上限を超えた年齢には達していないことを語用論的に表すことできるのである。また当該の人が標準値 y を下回る年齢でないことは *älter* のもつ意味に加えて、偽りと信じていることを言うな、という質の確率によって保証されることになる。

3. 結語

比較級は比較対象が欠如していることによっていわゆる「絶対比較級」の解釈を受けるが、実際には標準値が自動的に比較対象となる相対比較級に他ならない、と考えることによって比較級を統一的に説明できることを見た。

しかしこの標準値は具体的にはどのようにして確定されるのであろうか。alt / jung に関しては Fränkel や Helbig / Buscha によると 45 歳あたりを指すようであるが、これには確たる根拠は無く、あくまでも印象的な値に過ぎない。もちろんこの値が定まらないことによって標準値比較対照説の理論自体が揺らぐわけではないが、ドイツ語では実際に何歳あたりが標準値なのかは気になる。

この点に関して日本語の「おじさん」、「おばさん」について最近行われた高校 1・2 年生 40 人を対象とするアンケート調査は示唆に富む。⁵ この調査によれば年齢的には「おじさん」は 30 代後半～40 代前半、「おばさん」は 30 代前半～40 代前半あたりとする割合が高かった。またおじさんには、「おしぼりで顔をふく」、「つまようじでシーシーする」、「傘でゴルフの素振りをする」など、おばさんには「電車に乗ると、空いた席に一目散に走る」、「韓流ドラマにはまる」などの時代も反映したプロトタイプの特徴が挙げられている。ドイツ語の ein älterer Herr / eine ältere Dame についても、その標準値のみならず、プロトタイプがどのような特徴をもっているのかも興味をそそられる問題である。

⁵ 「おじさん・おばさん何歳から？」朝日新聞朝刊 2006 年 8 月 25 日、22 頁。

参考文献

- Becker, Thomas (2005): Warum eine alte Dame älter ist als eine ältere Dame. Zum absoluten Komparativ im Deutschen. In: Deutsche Sprache 33, S. 97 – 116.
- Behaghel, Otto (1923): Deutsche Syntax. Eine geschichtliche Darstellung. Band 1: Die Wortklassen und Wortformen. A. Nomen. Pronomen. Heidelberg.
- Bierwisch, Manfred (1987): Semantik der Graduierung. In: Bierwisch, Manfred / Lang, Ewald (Hg.): Grammatische und konzeptuelle Aspekte von Dimensionsadjektiven. Berlin, S.91 – 286.
- Brinkmann, Hennig (1971): Die deutsche Sprache. Gestalt und Leistung. Düsseldorf.
- Curme, George O. (1931): Syntax. A Grammar of the English Language, Vol.3. Boston. Rpt., Tokyo (1959).
- Curme, George O. (1977): A Grammar of the German Language. New York.
- Dücker, Joachim / Kempcke, Günter (Hg.)(1984): Wörterbuch der Sprachschwierigkeiten. Zweifelsfälle, Normen und Varianten im gegenwärtigen deutschen Sprachgebrauch. Leipzig.
- Duden(1995): Grammatik der deutschen Gegenwartssprache. Mannheim / Leipzig / Wien / Zürich.
- Duden(2005): Die Grammatik. Mannheim / Leipzig / Wien / Zürich.
- Engel, Ulrich (1988): Deutsche Grammatik. Heidelberg.
- Erben, Johannes (1972): Deutsche Grammatik. Ein Abriß. München.
- Flämig, Walter (1991): Grammatik des Deutschen. Einführung in Struktur- und Wirkungszusammenhänge. Berlin 1991.
- Friederich, Wolf (1994): Ein größeres Zimmer – A larger room? Zur Wiedergabe absoluter Komparative im Englischen. In: Lebende Sprachen 39, S.162-163.
- Glück, Helmut (Hg.)(2000): Metzler Lexikon Sprache. Stuttgart.
- Grice, H. Paul (1975): Logic and Conversation. In: Cole, Peter / Morgan, Jerry L. (Hg.): Syntax and Semantics. Bd. 3: Speech Acts. New York, S. 41 – 58.
- Heidolph, Karl Erich u.a. (1981): Grundzüge einer deutschen Grammatik. Berlin.
- Helbig, Gerhard / Buscha, Joachim (1984): Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. Leipzig.
- Helbig, Gerhard / Buscha, Joachim (1988): Kurze deutsche Grammatik für Ausländer. Leipzig. (在間進他 (訳) (1993) 『新・ドイツ語ハンドブック』東京: 第三書房.)
- Hentschel, Elke / Weydt, Harald(2003): Handbuch der deutschen Grammatik. Berlin / New York.

- Jung, Walter (1980): Grammatik der deutschen Sprache. Neuausgabe. Bearbeitet von Günter Starke. Leipzig.
- Liebsch, Helmut / Döring, Hellmut (1976): Deutsche Sprache. Handbuch für den Sprachgebrauch. Leipzig.
- Renicke, Horst(1955a): Inversion beim neuhochdeutschen Komparativ. In: Zeitschrift für deutsche Philologie 74, S. 68-76.
- Renicke, Horst(1955b): Steigerungsinversion. In: Zeitschrift für deutsche Philologie 74, S. 280-285.
- Schmidt, Wilhelm (1973): Grundfragen der deutschen Grammatik. Berlin.
- Schulz, Dora / Griesbach, Heinz (*1972): Grammatik der deutschen Sprache. München.
- Sommerfeldt, Karl-Ernst / Starke, Günter (1988): Einführung in die Grammatik der deutschen Gegenwartssprache. Leipzig.
- Sütterlin, Ludwig (⁴1918): Die deutsche Sprache der Gegenwart (Ihre Laute, Wörter, Wortformen und Sätze). Ein Handbuch für Lehrer und Studierende auf sprachwissenschaftlicher Grundlage zusammengestellt. Leipzig.
- Thurmair, Maria (2001): Vergleiche und Vergleichen: eine Studie zu Form und Funktion der Vergleichskonstruktionen im Deutschen. Tübingen.
- Varnhorn, Beate (1993): Adjektive und Komparation. Studien zur Syntax, Semantik und Pragmatik adjektivischer Vergleichskonstrukte. Tübingen.
- Weinrich, Harald (1993): Textgrammatik der deutschen Sprache. Mannheim u. a.
- Wilmanns, Wilhelm(²1899): Deutsche Grammtik. Gotisch, Alt-, Mittel- und Neuhochdeutsch. 3 Bde. 2. Abteilung: Wortbildung. Straßburg. Neudruck Berlin / Leipzig 1930.